

中村武羅夫

大町桂月氏



大町桂月氏



自分が初めて大町桂月氏に会ったのは、四月の中旬のことである。

桂月氏は、余り新らしくない縞の袴に、紺縞の羽織を着て居られた。その無ぞうさな風采と云ったら、之れが有名な大町桂月氏かと疑うぐらいである。

背は余り高い方ではない、丈の短かい人である。口は極めて訥である。然し、決して聞き難くはない。殆んど吃るに近いが、吃りながらあせらない。普通の人には吃る

と必らずあせる。あせるから尚吃るが、桂月氏はゆつくり話される、口が吃して声の出ない時には、何時までも黙って、静かに舌の廻り出すまで待たれる。そのゆつくりとした態度、決して小人に真似は出来ない。だから訥弁ではあるが聞き苦しくない。ゆかしいところがある。腹の大きい人は、同じ吃りながらも斯うも違うものかと思われた。

人物は些つと見たところでは、全るで田舎小学校の教師である。然し、じつと見て居ると、実に高い所がある。品位がある。重い所がある。又、些つと見ては老年のよ

うな所もあるが、青年のような所もある。桂月氏は老年なのか、青年なのか分らない。老青年である。

話をしながら、始終相手を見据えられる。度の強い近眼鏡をかけて、眼の光りは鋭いが、其中に何となく慈愛の影が含まれて居る。優しい温かい所がある。別に愛嬌があるのでもない。愛相が好いのもない。然し、初めて接しても何の遠慮何のへだてもない、極めて懐しい人である。強いて作った愛嬌、作った愛相はないが、天真の愛嬌、天真の愛相がある。初めて桂月氏に接しても、人は初対面であると云うことを忘れて了う。渾然として



其人格に抱擁されて了う。恍とりと酔わされて了う。それが桂月氏の人格の大きい所だ。心が広い所だ。その心には何人誰人を問わず、抱擁するだけのゆるやかな度量がある。

桂月氏は情にもろい人である。心の弱い人である。涙を心にたくわえた人である。人を憎み、人をころすと云うことの出来ない人である、筆の先では随分悪口を言う、然し、其悪口には毒がない。にくげがない。同じ悪口でも温い所がある。優しい所がある。之れ桂月氏に毒がないからだ。心に優しい温い所があるからだ。桂月氏の悪



口は、親が子に向つて云う悪口である。悪口を言いながらも、その悪口の裡には慈悲と涙がある。

桂月氏には少しもぶつた所がない。気取つた所がない。青年には同じ青年のような心持ちになつて接する。吾れを一段高きに置いて、人を其下に見下すと云つたような厭味がない。桂月氏の心には吾れも人も同等である。

桂月氏は天真流露な人である。己を以て偽り飾り銜うと云つたような事はない。何所までも卒直に自己を暴露して決して之を愧じられない。無邪気である。天心爛熳である。悪きを以て悪しとする人である。自分の罪を覆

うて罪を脱れると云ったような卑怯な振舞より、男らしく吾れと吾が罪を告白して、潔よくその罪に服すると云った性質の人だ。

初めてお目にかかった時に酒を飲まれた。自分は飲めない口なので控えて居ると、自分でついではちびりちびり、と飲まれる。桂月氏は酒中の趣を解する人、酔うて乱ると云うようなことはない。酔うて益々面白く、益々愉快に、多く弁ずるの人である。盃が手から放れた時には、煙草が必ず手にある、桂月氏は煙草も能く吸われる。桂月氏は、一度会って忘れることの出来ない人である。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館